

読売歌壇

小池 光選

コスモスがいろいろなかと言ふやうに倒れた
ままで花を咲かせる
仙台市 三角 清造

【評】コスモスは強い植物で、倒れたままでも平気、何事もないうな顔をして花を咲かせる。人間もこのように生きればよいのだなあ。それがなかなか難しい。

もんべ着て落下傘縫ひし女学生傘寿をすぎて
短歌に懸ふ日々
東京都 荒川 民

【評】先の戦争で動労働員された女学生は、落下傘を縫うようなことしたのである。傘寿を過ぎて、いまは短歌が生き甲斐の大切なひとつだ。上の句が具体的に印象に残る。ファミレスのタッチパネルの注文がうまくいかない。ああ生き辛。

新潟市 古泉 浩子

【評】これはまことに同感で、あはれうまくいかないとときがある。便利なようでも不便になったいまの世の中。なんとかしてほしい。そそり立つ銀杏黄葉の一本が神社の在りかを明らかにせり

浜松市 藤田 亜耶

秋日浴びホームのベンチに一人座すこのまま化石になりたい気分
松江市 加賀 昭人

年玉をもらひし子らがこつそりと中身見てゐるソファのうしろ
横浜市 古山 智子

タクシの屋根の雪が推し量る客待ちをする時間の長さ
南魚沼市 木村 圭

手を挙げて横断歩道渡る吾に見知らぬ男の子と添ひくくる
調布市 川久保洋子

動物園にて気づきたり擬木へと寄る猿の少なからぬに
東大和市 板坂 寿一

岩波の手垢に汚れし国語辞典いかにしようか父の思い出
奈良市 高橋 修

栗木 京子選

三時には毎日お茶を飲む二人あるわけもなし老いの密談
岐阜市 後藤 進

【評】二人のうちの一人は作者なのだろう。相手は妻か、あるいは友人か。「あるわけもなし」と表現されているが、二人が国家を揺るがす密談をしているのでは、と気になる。家の奥に九九を覚える声がして三代住む幸せ思ふ

鴻巣市 渡辺 昭夫

【評】九九を覚えているのは小学生の孫だろうか。さまざまな年齢の人物の気配が伝わることは、三代同居の豊かさである。「家の奥に」によって場面に深さが生まれた。「使用不可」テープ巻かれた鉄棒を独り占めしてクルリ北風

札幌市 橘 晃弘

【評】古びてしまった鉄棒だろうか。誰も触れない鉄棒に北風だけが近づいて、テープを動かしている。北風の逆上がりが楽しい。落ち葉掃くそんなことさへ嬉しくて病癒えたる顔の輝く

所沢市 杉本 葉子

リハビリに励み此処まで回復す食事・排せつ・車の操作
牛久市 藤代 省吾

素枯れたる草生に冬陽の匂いして吾亦紅の花はたつたの一本
栃木市 大森由紀子

腰痛でござの姫かと思ふ所作これもあやかと一人ほくそ笑む
山梨県 片田佐恵子

子育てを終えたら次は麴園育て出したり味噌に甘酒
横浜市 北見 美保

お見合いの返事を待ちし若き頃返事がないという返事あり
横浜市 岡 まゆみ

何処よりもこの場所が好き本をかえ古きソファのくぼみに座る
東京都 後藤 和子

俵 万智選

朝いつも細い影ひとつ乗りあわす始動いちばんのエスカレーター
東京都 浅倉 修

【評】結句に至って、その影は自分自身のものと分かる。心強い相棒のようでもあるが「細い」と形容されているので、やや頼りなくもある。朝いちばんだからこそ誰も見ていない静かなドラマ。

図書館のような売り場の瓶のジャム選んで取れば事典の重さ
高崎市 宮園佳代美

【評】ズラリと並んだジャムの瓶たち。ラベルを貼られて、なるほど図書館のようだ。その比喩を結句まで響かせて、実感がある。ひとりごとこぼれてしまふほど今日は「楽しかった」と言える一日
堺市 一條 智美

【評】つまり独り言が出たという歌なのだが、そんな状況を捉えなおし、その独り言で今日を形容し直しているところがユニーク。

にぎやかな店内よりもよく響くバックヤードのクリスマスソング
和光市 宮本 竜馬

艶めける真つ白な肩見せ合ひて笑ひさざめく大根畑
青梅市 諸井 末男

炒飯を角切りチャーシューごろごろと輝いてある横浜の夜
小諸市 藤 雪陽

三枚に下ろしてくるサービスの午後二時まで
横浜市 山本喜太郎

に鱈一尾買ふ
横浜市 山田 知明

花束のような毒のクレープを君へ捧げる竹下通り
横浜市 山田 知明

クリスマス・リースをはずし飾りかけて日本の玄関になる
和歌山県 助野貴美子

あの道であそここの角でこの庭で示し合せて葉が落ちる夜
東京都 大王グループ

黒瀬 珂瀾選

もう虹は消えてあなたは虹が出たことを知らずに配信終える
本巣市 椋 鳥

【評】リアルタイム配信を見ているうち、窓の外の虹に気付いた。だが、配信中のユーチューバーは、虹に気付くことはない。目の前で話しているように、画面の向こうこちらには大きな隔たりのがある。いつしか消えてゆく虹に、現代のネット社会の抒情を思う。

亡き夫と過しし街に降り立ちて黄に輝けるいちやうに遇へり
宇都宮市 福田 滋子

【評】きっと、夫と過ごしていた頃、いつも見ていた公孫樹なのだろう。変わらぬ命の輝き、そして夫の思い出が、そこにはある。早く来いと歌ったお正月九十四日目が間近に迫る
相模原市 荒井 篤

【評】幼時はあれほど待ったお正月も、今はあつという間に過ぎる。時の速さは変わる。妹の機嫌変動大きくて右往左往の四歳の兄

日南市 宮田 隆雄

冬ざれのころに点る灯りあり長調多きモーツァルト弾く
札幌市 住吉和歌子

日曜は時間たっぷりよく見てと旅のちらしが吾を誘惑す
滝沢市 小田佐枝子

ぼつねんと立ち尽くす白い秋明菊誰かの記憶と混ざり合いたい
名古屋 伊藤 千晴

切腹の仲代達矢の眼光に出会った池袋文芸坐
川越市 石田浩二郎

スーパや郵便局まで杖ついて歩けるほどの不自由愛す
須崎市 森 裕子

「和深」とう駅に真向かう枯木灘 海の碧さが空へとつづく
東大阪市 池中 健一

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし 蔵前郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はせいじんのひ